

## えせ社会主義社会の「合理化」とその実態 (前篇)

——中国における科学的理論の全面的歪曲について——

山 本 二 三 丸

- |  |                           |
|--|---------------------------|
| まえがき                                       | 5 株式企業の「合理化」…… (以下次号掲載予定) |
| 1 中国における代表的「理論」                            | 6 マルクス＝レーニン主義よりスターリン主義    |
| 2 科学的社会主義の核心的命題との対比                        | 7 東欧「社会主義」諸国の全面的崩壊の意義     |
| 3 「価値法則の利用」と「労働に応じての分配」<br>の内実             | 8 中国「社会主義」社会の発展方向         |
| 4 マルクス主義理論にたいする曲解と誹謗・攻撃<br>撃…………… (以上本号所載) | 9 簡単な総括<br>あとがき           |

### まえがき

1945年第二次世界大戦終結とともなって帝国主義列強の支配力が弱まるとともに、東南欧諸国の「人民民主主義」革命がはじまり、中国での「新民主主義」革命は勝利を迎え、それらと時を同じくして広範な植民地・従属諸国には民族解放＝独立闘争が燎原の火のように燃えひろがり、帝国主義的抑圧＝搾取に反対する人民勢力のすさまじい闘争の拡大・昂揚が全世界をおしつづみ、こうしていまや世界史は資本主義時代から社会主義時代への過渡にあるかのごとき様相を呈するにいたったものである。だが、現実はいさぎよく、安易な希望的判断などは、たちまち吹きとばされてしまったのである。たんに社会主義世界の拡大が停止したばかりでなく、資本主義国よりはるかにすすんだ社会制度をうちたてて生産力の不断の飛躍的發展が行なわれ、働く人民大衆の生活水準が、資本主義国のそれとはくらべものにならないほど高く豊かであると信じこまされていた善意の一般勤労人民大衆の目の前で、自称「社会主義」国はつぎからつぎへとぶざまな破綻＝崩壊をとげるといふ、おどろくべき事態が現出したのである。たんに崩壊をよぎなくされたというだけではない。これらの国の内部でさえ「社会主義体制」を否認し排撃するものから、支配政党である共産党・労働者党の存在すら認めない運動までもが広がっていく勢いにある。

つい一年前まではだれひとりとして夢想だにしなかったこのようなまさに世界史的激変が、なぜ、どのようにして必然的に生まれたのか、そして、いまや破産に追いこまれた「社会主義」諸国にとって、いったい、どのような生きる道がのこされているのか、「社会主義」社会は、その人間社会としての不適格を宣告されたまま世界史の中から抹殺されてしまう運命にあ

るのであろうか？ 帝国主義のもとで相も変わらず苦役と搾取を強いられ動物以下の生存をつづけなければならない勤労人民大衆にとっては、世界史は、この資本主義時代の永遠の存続をもって飾られるものとなるべきさだめとあきらめなければならないのであろうか？

上に述べたような現在の世界の動きは、右のような、さしせまった問題を生みだし、それについて然るべき回答を出すよう、われわれにつよく迫っている。

だが、この緊切な問題にたいしてなんらかの解答を出すことは決して容易なことではなく、なおいますこし事態の推移と方向とを見とどけるためにそれ相当の時間が必要と考えられる。私としては、すでに破綻し崩壊をとげつつある東欧諸国を直接論究の主題としてとりあげることとはひかえて、未だ堅固な体制を維持しているかに見える「社会主義」国・中国についてすこしく検討を加えてみることにしたいと考える。この中国においても、1989年6月にはいわゆる「天安門事件」と呼ばれるような、「変革運動」の勃発をみ、一時は体制変革の危機をうかがわせるものもあったのであるが、しかし、主として強力のおかげで重大な変化も生まれず、中国共産党指導層は相変わらず、その支配体制を維持している。この拙論では、中国の「社会主義」体制を支えている指導的な「理論」について、それがどのような本質的特徴をそなえたものか、そして右の支配体制の実態そのものが、その「理論」とどのように結びつき、これをいわば思想的基盤としてその上に成り立っているかということに、論究の焦点をおくことにしたいと考える。これらの問題を正しく考察することができるならば、それによって、われわれは中国の「社会主義」体制のあり方のみならずその指導層の性格についてもおよその認識を得ることができるものと考えられるのであるが、なおこの考察にして大過ないものとすれば、同じく「社会主義」社会を標榜してみごとな崩壊をとげた東欧諸国についても、そのかつての支配体制のあり方およびその崩壊の根拠について、その正確な認識のためのひとつの有力な手がかりまたは素材が得られるものと、私は期待しているのである。

## 1. 中国における代表的「理論」

すべての自称「社会主義」国を通じてそこで強く主張されていっていつさいの経済理論の基本となっているのは、「社会主義社会にも商品があり貨幣があるのは当然で、そこでは価値法則を利用することが必要である」という「主張」である。中国においても、この「主張」ははやくから公認されていたものであるが、最近にいたって、それがほとんど唯一の基本的理論としてきわめて重大な意義をもつことがにわかに強調されてきたようである。その間の事情をすこしくあとづけてみるために、中国における経済学界の最高峯と目され、現在は中国国務院の最高顧問の要職にもついている胡喬木が、中国社会科学院院長の地位にあった当時、1978年に、中国国務院会議において発言した要旨が、『経済法則にてらして事を運び、四つの現代化をはやめよう』と題して、『北京周報』第46, 47, 48号に連載されているので、そのなかから注目すべき箇所をいくつか引用してみよう。

①「われわれの社会主義経済は、意識的に、計画性のある、釣合いのとれた発展をすることができるし、またそうせねばならない。これは社会主義経済の根本的特徴である。」

②「われわれの計画は、計画的、均衡的發展の法則を順守、反映、運用し、……。」

③「社会主義のもとで、商品生産と商品流通は引きつづき長期にわたって存在し、わが国においてはさらに大々的に発展させる必要があり、価値法則は、経済生活において依然として欠かせない役割を果たすであろう。われわれは、計画を確定、実施する過程で、必ず価値法則を利用し、価値法則の要求を反映しなければならない……。」

④「価値法則は、商品経済の普遍的法則である。その基本点は、どの商品の価値もそれを生産する社会的必要労働時間によって決定され、商品の価格は、価値を基礎とし、商品は等価の原則にしたがって交換を行なうことである。」

⑤「スターリンは、価値法則は社会主義制度のもとでは、生産にたいして規制的作用を果さず、せいぜいいくらか影響するだけと言ったが、これは言い過ぎである。マルクスは、『資本主義の生産様式が解消した後にも、価値規定は労働時間の規制やいろいろな生産群の間への社会的労働の配分、最後に、それに関する簿記が以前よりもいっそう重要になるという意味であり有力である』（第3巻859ページ）と述べた。……価値法則は、社会主義制度下の生産に対して決して規制的作用をしないわけではない。われわれの経済建設の実践もこの点を立証している。国家計画を作成するに当り、われわれは、価格政策を通じて、価値法則に生産を規制する一定の作用を果させることができるし、またそうすべきである。」

みられるように、ここには、中国が社会主義社会であること、その社会主義社会には当然に商品生産と貨幣流通が存在しなければならないこと、そして、さらに、価値法則なるものを利用しなければならない、それによって生産力を発展させ社会主義建設をおしすすめて行かなければならない、という「理論」または主張がうちだされている。これは中国経済学界のいわば大御所的存在の主張であり、したがってこの主張は経済学者すべてはもちろんのこと、国务院を構成する政治的最高指導層にも異議なく承認されたものである。

ところが、商品生産と貨幣流通が支配的に行なわれ、価値法則を十分「意識的に利用し」たにもかかわらず、その成果は期待されたほどでもなかったものであろうか、右の胡喬木の発言が行なわれてから6年あまりたって、1984年10月開かれた中国共産党第十二期中央委員会第三回総会において、『経済体制改革に関する中共中央の決定』なるものが採択され発表されたのである。この『決定』は「改革は、当面のわが国の情勢発展のさし迫った要請である」と題されたその「一」からはじめてすべて10節から成るものであるが、そのなかで当面もっともつよくわれわれの関心を惹くのは、やはり「価値法則を意識的に運用する計画体制をうち立て、社会主義の商品経済を発展させよう」と題された「四」と、「合理的な価格体系をうち立て、経済槓杆の役割を十分に重視しよう」と題された「五」である。この二つには、注目に値する主張が少なからず含まれているのであるが、両者ともさほど長文にわたるものでないというも

の、1984年10月30日付『北京週報』に収められた日本語訳文についてみても、その「四」ひとつでもその字数はおよそ3000字を超えている。そこで以下では、まずその「四」について、比較的重要でない部分は省略して、当面重要と考えられる部分のうちの主なものを抜粋して示すことにし、なお「五」については、参考になると思われる冒頭の部分を補足的に抜粋して示すということにしよう。

まず「四」から。

①「社会主義社会では、生産手段の共有制をふまえた計画経済を実行しているので、資本主義社会に見られる生産の無政府状態と周期的恐慌を避けることができ、人民の日ましに増大する物質的・文化的生活の需要を生産面からたえず満たすことができる。これは、社会主義経済が資本主義経済よりもすぐれていることを示す根本的な目じるしのひとつである。」

②「建国いらい、われわれは計画経済を実行し、大量の資金、物資、人力を集中して、大規模な社会主義経済建設をすすめ、大きな成果をおさめてきた。同時に、歴史の経験が教えるところによると、社会主義の計画体制は統一性と融通性を結びつけた計画体制でなければならない。とりわけ、わが国は土地が広くて、人口が多いということ、交通が不便で、情報にとぼしく、経済、文化の発展がひじょうに不均衡である状態を短期間で完全に变えるのは難しいということ、また、わが国の商品経済はいまのところまだ未発達で、今後、商品生産と商品交換を大いに発展させる必要があるという実際状況などを考えるなら、なおさらこのような計画体制をうちたてなければならない。」

③「計画体制を改革するには、なによりもまず、計画経済と商品経済とを対立させる古くからの通念を打破し、社会主義計画経済は意識的に価値法則に依拠し、それを運用すべきもので、共有制をふまえた計画的な商品経済であるということ、このことをはっきり認識しなければならない。商品経済の十分な発展は、社会経済発展のとびこえることのできぬ段階であり、わが国経済の現代化を実現する必要条件である。商品経済を十分に発展させてこそ、経済の真の活性化をはかることができ、諸企業は効率を高め、経営に融通性をもたせ、複雑で変化の多い社会の要求にすばやく適応できるのであって、こうしたことは行政手段と指令的計画によるだけでは到底なしとげられないのである。同時に、社会主義の商品経済でも、それが広範に発展すれば、ある種の盲目性が生まれるので、計画による指導、調節と行政による管理が必要であることを見てとらなければならない。これは社会主義の条件のもとで十分になしとげうるものである。したがって、計画経済の実行と価値法則の運用、商品経済の発展とは排斥しあうものではなく、統一されるものであり、それらを対立させるのは誤っている。」

④「商品経済と価値法則の問題からみると、社会主義経済と資本主義経済との区別は、商品経済が存在するかどうか、価値法則が役割を果たすかどうかにあるのではなく、所有制の異なる点にあり、搾取階級が存在するのか、勤労人民が主人公であるのか、どのような生産目的に奉仕するのか、全社会の範囲で価値法則を意識的に運用するのかという点にあり、また商品関

係の範囲の異なる点にもあるのである。わが国社会主義の条件のもとでは、労働力は商品でなく、土地、鉱山、銀行、鉄道など、国有の企業や資源はすべて商品ではない。」

⑤「わが国の計画体制の基本点については、歴史的経験と十一期三中総以来の実践にもとづいて、つぎのように概括すべきである。第一、総体的にみれば、わが国が実行しているのは、計画経済つまり計画的な商品経済であって、完全な市場メカニズムの調節による市場経済ではない。第二、完全な市場メカニズムの調節による生産と交換は、主に一部の農業・副業生産物、日用雑貨、サービス・修理業の役務に限られる。これらは、国民経済において補助的な、だが欠くことのできない役割を果している。第三、計画経済の実行は、指令的計画を主とすることと同じではない。指令的計画と指導的計画はともに計画経済の具体的な形態である。第四、指導的計画は主として経済槓杆を運用することによって実現される。指令的計画はぜひとも実行すべきもののだが、そのさいも価値法則を運用しなければならない。」

つぎに「五」から。

⑥「わが国のいまの価格体系は、これまで長期にわたって価値法則の役割を軽視してきたこと、その他の歴史的原因によって、ずいぶん混乱している。すくなくとも商品の価格は、価値も反映せず、需給関係も反映していない。そのような不合理な価格体系を改革しないなら、企業の生産・経営の効果を正しく評価することができず、都市と農村の物資の円滑な交流を保証することができず、技術の進歩と生産構造、消費構造の合理化を促進することができず、不可避免的に社会の労働の大きな浪費を生み、労働に応じた分配原則の貫徹をものはなはだしく妨げることになる。企業の自主権のいっそうの拡大にともない、企業の生産・経営活動にたいする価格の調節作用はますます顕著となり、合理的な価格体系の確立がいっそう急がれている。計画体制と賃銀制度の改革をふくめ、各分野の経済体制の改革は、価格体系の改革に左右されるところが非常に大きい。価格は最も効果的な調節手段である。合理的な価格は、国民経済を混乱させずに活性化する重要な条件である。そして、価格体系の改革は、経済体制全般の改革をきめるカギである。」

胡喬木の論文と右の『経済体制改革に関する中共中央の決定』の中に示されたきわだった特徴的な「主張」の眼目は、要するに、中国は、商品生産と商品交換の行なわれる社会主義社会であって、そこでは価値法則を意識的に運用することによって、計画的に釣合いのとれた商品経済の発展が保証されうるので、ということである。そこで、こうした眼目について、それがはたしてどのような客観的妥当性をもっているものかということをも、まずつぎに簡単に吟味することにしよう。

## 2. 科学的社会主義の核心的命題との対比

科学的社会主義を築きあげたのは、いうまでもなく、マルクスとエンゲルスであり、これを正しく継承し発展させて社会主義革命への道を切りひらいた傑出した指導者がレーニンそのひ

とであることは、周知のところである。そこで、まずマルクス＝エンゲルスが社会主義社会および商品生産社会についてどのように規定しているかということを確認し、そのうえで「価値法則の利用」という言葉についてその客観的意義を吟味してみることにしたいと考える。

まず、社会主義社会とはいかなる社会であるかということ、を、わかりやすく、しかも明確に規定し、その内容を疑う余地なく厳密かつ懇切に説明しているのは、マルクスの晩年の名著、『ゴータ綱領批判』にほかならないことはだれひとりとして否定しえないところといえる。そこで、この名著のなかから、——紙幅の制限を考慮して——当面とくに緊要と考えられる叙述部分を二つだけ、引用してかかげることにしよう。

「生産手段の共有を土台とする協同組合的社会の内部では、生産者はその生産物を交換しない。同様にここでは、生産物に支出された労働がこの生産物の価値として、すなわちその生産物にそなわった物的特性として現われることもない。なぜなら、いまでは資本主義社会とはちがって、個々の労働は、もはや間接にではなく直接に総労働の構成部分として存在しているからである」(Marx-Engels Werke, Bd.19. s.19—20. 訳大月版19ページ、傍点—マルクス)。

「ここで問題にしているのは、それ自身の土台の上に発展した共産主義社会ではなくて、反対にいまようやく資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会である。したがって、この共産主義社会は、あらゆる点で、経済的にも道徳的にも精神的にも、その共産主義社会が生まれでてきた母胎たる旧社会の母斑をまだおびている。したがって、個々の生産者は、彼が社会ににあたえたのと正確に同じだけのものを——控除をしたうえで——返してもらう。個々の生産者が社会にあたえたものは、彼の個人的な労働量である。たとえば、社会的労働日は個人的労働時間の総和から成り、個々の生産者の個人的労働時間は、社会的労働日のうちの彼の持分である。個々の生産者はこれこれの労働（共同の元本のための彼の労働分を控除したうえで）を給付したという証明書を社会から受け取り、この証明書をもって消費手段の社会的貯蔵のうちから等しい量の労働が費やされた消費手段を引きだす。個々の生産者は自分が一つのかたちで社会にあたえたのと同じ労働量を別のかたちで返してもらうのである」(ibid. s. 21. 訳大月版19—20ページ、傍点—マルクス)。

マルクスのもっともすぐれた後継者であるレーニンがこのマルクスの主著の内容を完全に全面的に認めたばかりでなく、彼自身の名著『国家と革命』(1918年)の中でその核心的理論を首尾一貫的に展開していることは改めて説くまでもない周知の事実である。

つぎに誰ひとり知らぬもののないエンゲルスの名著『反デューリング論』からほんの一部分だけあげておこう。

「社会が生産手段を掌握するとともに、商品生産は廃止され、それとともに生産者にたいする生産物の支配が廃止される。社会的生産内部の無政府状態に代わって、計画的、意識的な組織が現われる。個人間の生存闘争は終りを告げる。これによってはじめて、人間は、ある意味で決定的に動物界から分離し、動物的な生存条件からぬけだして、ほんとうに人間的な生存条

件のなかに踏みいる。いままで人間を支配してきた、人間をとりまく生活諸条件の全範囲が、いまや人間の支配と統制に服する。人間は自分自身の社会的結合の主人になるからこそ、またそうなることによって、いまやはじめて自然の意識的な、ほんとうの主人になる。これまでは、人間自身の社会的行為の諸法則が、人間を支配する外的な自然法則として、人間に対立してきたが、これからは、人間が十分な専門知識をもってこれらの法則を応用し、したがって支配するようになる。これまでは、人間自身の社会的結合が、自然と歴史とによって押しつけられたものとして、人間に対立してきたが、いまやそれは、人間自身の自由な行為となる。……………（以下略）」(Marx-Engels Werke, Bd. 20. s. 264. 訳大月版292ページ)。

みられるとおり、共産主義社会の低い段階または第一段階とされる社会主義社会の本質的特徴は、社会のすべての生産手段が共同的所有のもとにあること、すべての成員は社会存続のために必要な社会的総労働を——社会全体の計画にもとづき、社会の管理のもとに——分担して受けもち、その生産物はすべて社会の取得するところとなり、各労働者は、その必要とする生活手段を、直接に社会から、彼の給付した労働に応じて——社会的必要充足のための分担分を控除したうえで——受けとることになっている。それゆえ、この社会主義社会では、当然のことながら、生産物はひとつ残らず社会全体の取得するところであり、各成員が受けとる生活手段は彼自身の再生産のために直接に分配されなければならないものであって、各成員が受けとった生活手段を改めて交換するなどという、間拔けな真似は考えもつかないところである。なお、ここでしかと確認しておく必要があるのは、この社会主義社会では各労働者の担っている労働力、つまり精神的能力と肉体的能力とはいずれも均衡のとれたきわめて高度の発達水準にあり、このためにどの成員の労働も直接に等質の労働としてその労働量を同じ社会的単位をもって計量することが可能かつ必然であるということである。このような条件が整っていないときには、各労働者の給付した労働量も生産物の生産のための社会的必要労働量も計量することはまったく不可能であって、「労働に応じての分配」などという言葉は、内容の欠けた、全くのまやかしの空文句でしかないことになるのである。

つぎに、商品および商品生産社会についての本質規定は、マルクスの主著『資本論』全巻を通じて疑いもなく解明されているところであるが、なお当面の問題にかんするかぎりでも確認しておく必要のある命題を、つぎの三つだけ、引用してかかげよう。

第1巻第1章「商品」第4節「商品の物神的性格とその秘密」から。

①「およそ使用対象が商品になるのは、それが互いに独立に営まれる私的諸労働の生産物であるからにはほかならない。これらの私的諸労働の複合体は社会的総労働をなしている。生産者たちは自分たちの労働生産物の交換を通じてはじめて社会的に接触するようになるのだから、彼らの私的諸労働の独自の社会的性格もまたこの交換においてはじめて現われるのである。言い換えれば、私的諸労働は、交換によって労働生産物がおかれ労働生産物を介して生産者たちがおかれるところの諸関係によって、はじめて実際に社会的総労働の諸環として実証されるの

である。それだから、生産者たちにとっては、彼らの私的諸労働の社会的関係は、そのあるがままのものとして現われるのである。すなわち、諸個人が自分たちの労働そのものにおいて結ぶ直接に社会的な諸関係としてではなく、むしろ諸個人の物的な諸関係および諸物の社会的な諸関係として現われるのである」(Marx-Engels Werke, Bd.23. s.87. 訳大月版98—99ページ, ゴシック体—山本)。

②「だから、人間が彼らの労働生産物を互いに価値として関係させるのは、これらの物が彼らにとっては一様な人間の労働の単に物的な外皮として認められるからではない。逆である。彼らは、彼らの異種の諸生産物を互いに交換において価値として等置することによって彼らのいろいろに違った労働を互いに人間の労働として等置するのである。彼らはそれを知ってはいないが、しかし、それを行なうのである。それゆえ、価値の額に価値とはなんであるかが書いてあるのではない。価値は、むしろ、それぞれの労働生産物を一つつ社会的な象形文字にするのである。あとになって、人間は象形文字の意味を解いて彼ら自身の社会的な産物の秘密を探りだそうとする。なぜならば、使用対象の価値としての規定は、言葉と同じように、人間の社会的な所産だからである。労働生産物は、それが価値であるかぎりでは、その生産に支出された人間の労働の単に物的な表現でしかないという後世の科学的発見は、人類の発展史上に一時代を画するものであるが、しかしそれはけっして労働の社会的性格の対象的外観を追い払うものではない。この特殊な生産形態、商品生産だけにあてはまること、すなわち、互いに独立な私的諸労働の独自の社会的性格はそれらの労働の人間の労働としての同等性にあるのであってこの社会的性格が労働生産物の価値性格の形態をとるのだということが、商品生産の諸関係のなかにとらわれている人々にとっては、かの発見の前にもあとにも、最終的なものに見えるのであって、それは、ちょうど、科学によって空気がその諸要素に分解されてもなお空気形態は一つの物理的な物体形態として存在しているようなものである」(ibid.s.88. 訳99—100ページ, ゴシック体および傍点—山本)。

つぎに、第1巻第3章「貨幣または商品流通」第1節「価値の尺度」の中にマルクスが付記した注50から(……は中略部分)。

③「なぜ貨幣は直接に労働時間そのものを代表しないのか、なぜ、たとえば一枚の書付が労働時間を表わすというようにならないのか、という問いは、まったく簡単に、なぜ商品生産の基礎の上では労働生産物は商品として表わされなければならないのか、という問いに帰着する。なぜならば商品という表示は、商品と貨幣商品とへの商品の二重化を含んでいるからである。または、なぜ私的労働は、直接に社会的な労働として、つまりその反対物として、取り扱われることができないのか、という問いに帰着する。……ここでもう一度言っておきたいのは、たとえばオーエンの「労働貨幣」が「貨幣」でないことは、劇場の切符などが貨幣でないのと同じことだ、ということである。オーエンは、直接に社会化された労働を前提しているが、それは、商品生産とは正反対の生産形態を前提するものである。労働証明書は、ただ、共同労



働における生産者の個人的参加分と、共同生産物の消費充分にたいする彼の個人的請求権とを確証するだけである。しかし、商品生産を前提しておきながら、しかもその必然的諸条件を貨幣の小細工で回避しようというようなことは、オーエンにとっては思いもよらないことなのである」(ibid. s.109. 訳大月版125—126ページ、傍点—山本)。

「私的労働」とは、いうまでもなく、生産手段の私的所有のもとで、その私的所有者が、私的計算において、私的利益のために行なうものであり、資本主義社会を支える商品生産とかたく結びついたものであり、生産手段の社会的所有にもとづく社会主義社会では、棄にしたいともまったく見出されえないものである。この明白この上もない経済学の初歩的・基本的法則をまったく理解できない自称「マルクス主義者」たちのために、マルクスの盟友、エンゲルスが、その名著『反デューリング論』の中で、それこそ噛んでふくめるように説明しているくだりを——いささか長きに過ぎるうらみはあるが、手短かな文章ではどうしても歪んでその眼に映るという斜視癖の「マルクス主義者」もあまいたるので——引用してかかげておこう。これは、右の名著の第3篇「社会主義」の「4 分配」のなかの一節である（……は省略部分を示す）。

「経済学で知られている唯一の価値は、商品の価値である。商品とはなにか？ 多かれ少なかればらばらの私的生産者たちの社会でつくりだされる生産物であり、したがって、まずはじめには私的生産物である。だが、これらの私的生産物は、それらが自家消費のためではなく、他人の消費のために、すなわち社会的消費のために生産されるときにはじめて、商品となるのである。それらは、交換を通じて社会的消費にはいりこむ。こうして、私的生産者たちは、一つの社会的連関のなかにおり、一つの社会をかたちづくっている。だから、彼らの生産物は、私的生産物でありながら、同時にまた——だが、そう意識してではなく、いわば不本意に——社会的生産物でもある。では、これらの私的生産物の社会的性格はどういう点にあるのか？ 明らかに、次の二つの性質にある。第一に、これらはすべて人間のなんらかの欲望をみたすものであり、その生産者にとってだけでなく、他人にとってもある使用価値をもっている、ということである。また第二に、それらは、種々さまざまな私的労働の生産物でありながら、同時に、そのものとしての人間的労働、一般的人間的労働の生産物である、ということである。それらは、総じて他人にとっても使用価値をもっているかぎり、交換にはいることができるのだし、また、一般的人間的労働、すなわち人間労働力のたんなる支出がそれらすべてにふくまれているかぎり、それぞれにふくまれているこの労働の量におうじて、交換においてたがいに比較され、等しいとか等しくないとかとされることができるのである。……………」

だから、ある商品がこれこれの特定の価値をもっていると私が言うとき、私は次のことを言っていることになる。（一）それが社会的に有用な生産物であること、（二）私人が私的な**決定で生産したもの**であること、（三）私的労働の生産物でありながら、同時にいわば知らず知らずのうちに、望みもしないのに、社会的労働の生産物でもあること、しかも、社会的な仕方、すなわち交換を通じて確かめられた一定量の社会的労働の生産物であること、（四）私は

この量を労働そのもので、すなわちあれこれの労働時間数で言いあらわさないで、他の商品で言いあらわすということ、これである。……私は、この確かめられた労働時間の量を労働時間数で言いあらわすことはできない。労働時間数は、私には相変わらずわかっていないのである。そうではなく、やはり回り道をして、相対的に、等しい量の社会的労働時間をあらわす他の一商品で、それを言いあらわすよりほかはない。……」(Marx-Engels Werke, Bd. 20, s. 285—286, 訳大月版315—316ページ。傍点—エンゲルス, ゴシック体—山本)。

ここに述べられているのは、私的所有にもとづく商品生産社会、またはそう言ってよければ資本主義社会において労働生産物が必然的に採る社会的形態としての商品、その商品の本質的内容であって、このように商品は私的所有にもとづく商品生産社会または資本主義社会にしか存在しえないものであることが明確に説明されている。

それゆえ、私的所有を完全に廃絶した社会的所有にもとづく社会主義社会においては、商品も価値もひとかけらも存在する余地のないことは自明であるが、では、そこで生産される生産物やその生産に支出される労働はどのようなものとしてとらえるべきであろうか？ この当然の問題についても、エンゲルスは、商品生産社会と社会主義社会との本質的区別についてまったく無知な自称「マルクス主義者」たちのために、右の名著の同じ節の中で、どんな小学生にもわかるように、懇々と説明してくれているのである。

「社会が生産手段を掌握し、生産のために直接に社会的に結合して、その生産手段を使用するようになったそのときから、各人の労働は、その特殊な有用性がどんなにさまざまであっても、はじめから直接に社会的な労働となる。そうなれば、ある生産物にふくまれる社会的労働の量を、まず回り道をして確かめるには及ばない。平均的にどれだけの社会的労働が必要かということは、日々の経験が直接に示してくれる。……だから、そのときになれば生産物に投入された労働量が社会には直接にまた絶対的にわかっているのに、その後も相変わらず、以前には便法として止むをえなかった、たんなる相対的な、動揺的な、不十分な尺度で、すなわちある第三の生産物でそれを表現し、その自然的な、十全な、絶対的尺度である時間で表現しないなどということは、社会にとって思いもよらないことである。……したがって、右のような前提のもとでは、社会は生産物にどんな価値も付与しない。社会は、100平方メートルの布の生産に、たとえば1000労働時間を要したという簡単な事実を、この布は1000労働時間の価値をもつなどという、的はずれの無意味な仕方では表現することはないであろう。もちろん、そうであっても、社会は、それぞれの使用対象の生産にどれだけの労働が必要かということを知っていなければならないであろう。社会は、生産手段——これにはとくに労働力もはいる——におうじてその生産計画を立てなければならないであろう。結局は、種々の使用対象の効用が、——それらを互いに比較秤量し、またそれらの生産に必要な労働量とも比較秤量したうえで——生産計画を決定するであろう。人々は、高名な「価値」の仲だちによらないでも、万事をしごく簡単にやっていくであろう」(ibid. Bd. 20. s. 288, 訳大月版310ページ。傍点—エンゲ

ルス）。

以上手短かに引用したマルクスとエンゲルスの所論は科学的社会主義の根幹をなす経済理論のうちのもっとも基本的、核心的な理論を示したものであって、およそマルクス＝レーニン主義を真面目に学ぼうとする人間でこのことを解しえないものはひとりもないはずである。右の基本的理論を要約すれば、社会主義社会には商品もなければ価値などというものもまったく存在しえないし、また反対に商品生産のあるところには社会主義社会はまったく存立しえないものだ、ということである。この基本的・原則的見地に照らしてみたとき、さきにあげた中国の代表的「理論」や主張は、どのように評価すべきであろうか？

中国では、指導層全体が声を大にして商品生産が行なわれていると声明しており、しかもそこには、後段で見るように、資本主義社会にはみられないような後れた半自然経済や様々の闇取引、前期的破廉恥犯罪の盛行さえうかがわれるといった実態がある。それにもかかわらず、中国指導層は口を揃えて「中国は社会主義社会である」と声明しているのである。それゆえ、さきの科学的社会主義の核心的命題と中国指導層の声明とをつきあわせれば、中国指導層の立場がどのようなものであるか、簡単に誤りなく判断されうるのである。彼らは、科学的社会主義の見地に立つことなく、社会主義社会の本質をねじゆがめ、さらに商品経済についての反科学的・俗物的観念をふりまき、こうして科学的社会主義、いいかえればマルクス＝レーニン主義の全体系をことごとくふみにじり、改ざんし、これをまったく反対の俗物的表象のごった煮につくりかえしてしまっているのである。

社会主義社会の本質規定について中国指導層の主張がどんなにでたらめで無内容のものかということは、さきに引用したマルクス＝エンゲルスの言明によって疑う余地はなく、また、彼らが口癖のようにもてはやしている「商品経済」なるものについても、マルクス経済学の基礎理論をまったく理解せず、『資本論』の第1巻第1章すら目を通したことのないほどひどい、括弧つき「マルクス＝レーニン主義者」でしかないことも、すでにはっきりしたところと考えられるが、なお念のため、彼らがもっともらしく、さももったいぶって担ぎまわることと善意の勤労人民大衆をたぶらかしている二つの聞かせ文句、すなわち、「価値法則の利用」と「労働に応じた分配」の本当の中味がどんなものであるかということを明かしてみることが大切である。というのは、それによって彼ら指導層のあり方のほどが、よくよく明らかになるものと期待できるからである。

### 3. 「価値法則の利用」と「労働に応じた分配」の内実

中国指導層が好んでひけらかすのは、ここに示した二つの文句であるが、しかし彼らは、一人残らず、それらの文句の真の意味がどんなものであるかはわけわからず、からっぽの言葉を並べてその主張がさも確実な理論的根拠のあるものだという、いつわりの体裁を、ただ体裁だけをとりつくろっているのである。

まず「価値法則の利用」から見ていこう。いったい、「価値法則」とはどういうことか？ 彼らは、一人残らず、『資本論』全三巻の中にみごとに展開されている価値法則の解明など、まったくその念頭にはなく、かの世紀的な「屠殺者」で凶悪無比な反マルクス＝レーニン主義者、スターリンが当てずっぽうに編み出した、でたらめの解釈をうのみにしてこれを復唱するのが精いっぱいなのである。このスターリン直伝の解釈というのは、つぎの二つである。そのひとつは、「価値法則とは、価値と価格とが一致することで、価格が価値から乖離するのが、価値法則の侵害である」というものであり、いまひとつは、「社会的必要に応じて社会的総労働をそれぞれの生産部門に配分するのが、価値法則である」というものである。この二つの解釈が申し分のないたわごとであることはすぐわかる。

まず、第一の解釈については、価値および価格という基本的概念についてのまったくの無知と誤解をあらわすものだという点を指摘する必要がある。マルクスは『資本論』第1巻の冒頭の第1章第1節において交換価値の分析を通じて価値を明らかにしたところで、

「研究の進行は、われわれを、価値の必然的な表現様式または現象形態としての交換価値につれもどすことになるであろう」と明記している (Marx-Engels Werke, Bd. 23, s. 53, 訳大月版 52ページ, 傍点一山本)。商品の価値は本質であり、交換価値、いいかえれば価格は、その必然的な現象形態なのである。このマルクスの明示するところを見て、同じくマルクスが機会あるごとに強調していた格言、「もし本質と現象とが一致するならば、科学はおよそ不要である」をすぐさま想起しない者は、マルクス主義理論とは無縁である。商品価格は、つねに商品価値の上または下に運動しており、平均的に見た場合にのみ一致するものとなっている。商品市場の実際についてみても、価格が価値にぴったり一致しつづけるといったことはありえない。だから、価値と価格との乖離という現象がいつでもある、いいかえれば「価値法則はつねに侵害されればなし」ということになる。つねに侵害されてめったに貫徹することのない法則——これはまたなんとあわれな法則であることよ！

もうひとつの同じくスターリン直伝の解釈——「社会的総労働を各生産部門に必要なに応じて適当に分配する法則」——は、ちょっとみるとマルクスそのひとの文章に根拠をおいたもので、さももっともらしくみえるが、実は、それは、マルクスの文章の意味がわけわからず、お話にならないほど曲解した頭がつくりだしたものなのである。そのマルクスの文章というのは、マルクスが、1868年7月11日、友人ルートヴィヒ・クーゲルマンにあてた手紙の中に見出されるのであるが、この有名な手紙の内容はよく援用されるものであるとはいえ、そのほとんどの場合合まってひどい曲解をこうむることになっているものである。この場合もそうなのであるが、まずその文章をつぎにかかげておかなければならない。

「どんな国民でも、一年はおろか、二、三週間でも労働を停止しようものなら、くたばってしまうことは、どんな子供でも知っています。どんな子供でも知っていると云えば、次のことにしてもそうです。すなわち、それぞれの欲望の量に応じる生産物の量には、社会的総労働の

それぞれ一定の量が必要だ、ということです。社会的労働をこのように一定の割合に分配することの必要性は、社会的生産の確定された形態によってなくなるものではなく、ただその現われ方を変えるだけのことというのも、自明のところです。自然諸法則というのは総じてなくすることができないものです。歴史的にさまざまな状態のなかで変わり得るものは、それらの法則が貫徹されていく形態だけです。そして社会的労働の連関が個々人の労働生産物の私的交換として自らを妥当させているような社会状態で、この労働の一定の割合での分配が貫徹される形態こそが、これらの生産物の交換価値にほかならないのです」(Marx-Engels Werke, Bd.32, s. 552—553, 訳大月版454ページ, 傍点—マルクス)。

見られるように、社会的総労働をそれぞれの生産部門にその必要に応じた量だけ分配しなければならないというのは、すべての人間社会にとって必ず守られなければならない社会的自然法則であって、それは価値法則とはなんの関係もないものである。無計画的・無政府的生産の支配する商品生産社会では、この法則は、意識的・計画的に人間の手でつらぬかれることはまったく不可能で、交換価値のおかげで、その変動によって、辛うじて不均衡がわかり、交換価値の変動そのものがこれをあとから訂正してくれることになっているのである。ここに価値法則に結びつく事柄はなにひとつないのに、なぜ右の社会的自然法則をむりやり価値法則に結びつけようという、まったく筋違いのこじつけが得てして生半可な自称「マルクス経済学者」の頭をとらえるかといえ、それは、右の叙述にすぐつついてマルクスが、行を改めて、価値法則という文字を冒頭にいただくつぎの叙述を展開しているために、「さてこそ、さきのパラグラフは価値法則のことを言っているにちがいない」と早や呑み込みする癖があるからである。

「価値法則がいかに貫徹されていくかを展開することのうちにこそ、科学は存するのです。だから最初からこの法則に矛盾するように見える諸現象を「説明」しようとすれば、科学以前の科学を持ち出さなければならないことになるでしょう。リカードの誤りはまさに、彼が価値について論じている第一章で、まず展開されなければならない、ありとあらゆる範疇を、与えられたものとして前提し、これらの範疇が価値法則に適合していることを証明しようとしたことにあるのです」(ibid. s. 553, 訳大月版454ページ, 但し、訳文は山本が訂正したもの)。

この叙述部分については、やはり説明を省くわけにはいかないもので、読者諸君のお許しをいただいてほんのすこし解説しておこう。まず、価値法則とはどういうことかといえ、それは、さきに挙げた「価値は本質であり、交換価値または価格はその必然的な現象形態である」という命題そのものが示しているように、交換価値、いいかえれば価格はつねに価値を中心として運動し、価値によって規制されるということである。ところが、この価値による価格の規制という法則は、商品生産の発展段階が異なれば、その貫徹の仕方は異ならざるをえない。すなわち、生産手段の所有者自身が労働者である単純商品生産の段階では、商品の交換価値または価格は、直接にその商品価値によって規制され、価値を中心として運動するのであるが、商品生産の高度に発展した資本主義的商品生産の段階では、個々の商品の市場価格は、その価値で

はなく、これと離れた生産価格によって規制され、これを中心として運動するのであって、資本の有機構成の異なったさまざまな生産部門全体の総生産物を総計してみたときに、生産価格総計は商品価値総計に等しくなり、資本主義的生産部門全体の総生産物を合わせてみたときはじめてその価格は価値によって規制されるという価値法則が貫徹することになっているのである。マルクスがここで強調しているのは、もっとも簡単でもっとも抽象的なものからしだいに論理必然的に規定を加えていくことにより、しだいにより複雑でより具体的なものへ向上してゆかなければならないという、科学としての存在の根本要件である理論体系のあり方であって、それゆえにこそ「展開する」entwickeln という言葉をかかげているのである。価値法則についての正しい的確な「展開」を示しているものこそまさしく『資本論』全三巻であって、リカードが価値について解明することが課題であるその主著の第1章で、はやくも生産価格という概念をもちこんで論じているのは、正確な「展開」をなおざりにしたもので、科学としてあるべき理論体系としてはまったく欠格のもので、と批判しているのである。

いずれにせよ、先きに述べた社会的労働の配分の社会的自然法則が価値法則などとまったく無縁のものであることは、およそ文字を読むことのできる人にはすぐわかることである。

ところで、中国指導層の理論家が価値法則の内容をどのように誤解し曲解しているとしても、その解釈のことはしばらく措くとしても、なおここに重大な問題が残されていることを知らなければならない。それは、この法則の「利用」ということである。「利用」というからには、実際に具体的な方法が実施され、ある特定の所期の成果が生まれているのでなければならない。いったい、どのような形、どのような方法をとって利用するのか？ といえば、なんと、この当然の質問に答えるような具体的な方法も、なにもかも、まったく無いのである。そしてまた、このまったく掛け声だけでしかない「価値法則の利用」ということは、はじめからわかっていることなのである。いったい、ひとつひとつの商品について、その価値がどのくらいかなどということがつきとめられるだろうか？ いったい、どのようにして価値量を表現し、比較しあうことができるであろうか？ オシャカさまが逆立ちしてみせてもまったくつかみようのない価値を「現代化」の専門家先生がたは、いったい、どうやってつかまえようというのであろうか!? 私のみるところでは、この「超能力」の先生方は、どうやら生産費を価値と早や合点して、販売価格を生産費によって規制することが「価値法則の利用」だと信じこんでいられるようである。だが、かりにこのまったく見当違いのこじつけを一応認めたとしても、同一種類の商品についてまさに生産者ごとにちがう無数の生産費を前にして、「価値法則の利用」の一手でどのようにして販売価格をきめようというのであろうか？ こうした権威的空論家の御託宣にくらべると、中国全土を股にかけて稼ぎまくっている何十万、何百万という「担ぎ屋」のほうは、商品価格の決定については、はるかによく知識をもち、実行力にも数倍長けていることは、おそらくまちがいないところであろう。

さて、つぎに中国指導層がさかんにふりまいている聞かせ文句、つまり「労働に応じたの分

配」という合言葉をとりあげて、その中味をよくみてみなければならない。マルクスやレーニンがもしこの合言葉を聞かされたならば、彼らは、即座に、口を揃えて、これをうちだした中国指導層がマルクス＝レーニン主義の基本的理論はおろか、マルクスの文章ひとつ読みとる能力もなく、かえってその真意を歪めることにけんめいであること、彼ら指導層が平素中国の勤労人民大衆を正しく教え導き育てあげることなどいっさい放り出して、ひたすら彼らを蔑視し、物質的な餌をふりまいこれを釣るという策謀を事としていることをはっきりと指摘したうえで、こうした指導層を、破廉恥きわる反マルクス＝レーニン主義的徒党として永久に追放すべきであると宣言したにちがいないと思われる。ことほどさようにこの合言葉の中には反マルクス＝レーニン主義的がらくたがいっぱいつめこまれているので、われわれとしても、その中味のほどをとくと吟味することがこのさい緊要なのである。

「労働に応じての分配」というこの言葉を読んだひとがだれでもすぐ思うかべるのは、本稿でさきに引用してかかげられているマルクスの名著『ゴータ綱領批判』の中の一節である（本稿74ページ参照）。「資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会」つまり社会主義社会においては、その成員が社会に与えた労働にたいしてそれと等しい量の労働が費やされた消費手段を——ただし、必要な控除をうけて——社会から受けとるのだと、そこに明記されている。つまり、社会主義社会で「労働に応じての分配」の原則が貫かれていることとその根拠について、きわめて精確な叙述がそこに示されているのである。胡喬木はじめ中国指導層の面々はここにくだりに飛びついたわけであるが、このことは、彼らの慧眼のほどを実証するものではなく、かえって彼らの身についている狡智と人民蔑視の性向とを実証するものとなっているのである。そのわけは簡単である。右の『ゴータ綱領批判』の中の「資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会」つまり社会主義社会にかんする記述にすぐ先き立って、社会主義社会をもふくめてすべての共産主義社会、マルクスの言葉をかりれば、「生産手段の共有を土台とする協同組合的社会」について、そのもっとも根本的な特質、すなわちそこでは「生産物の交換はなく、商品も価値もすべて存在する余地はまったくない」ということがはっきりと述べられており（本稿74ページ参照）、この「商品も価値も存在しない」ということとの結びつきにおいてつぎの基本原則——「給付した労働にたいしてそれと等しい労働の量が費やされた消費手段の社会的分配」——が必然的に導き出されているのである。「商品も価値も存在しない」からこそ、「労働による、労働量に応じた消費手段の分配」があるのであり、また反対に「労働による、労働量に応じての消費手段の分配」が行なわれるかぎり、「商品も価値も、したがってまた貨幣も、存在する余地はまったくない」のである。『ゴータ綱領批判』の中から引用してかかげた右の二つの叙述部分は、このようにそれらの内容が緊密に絶びつき、いわば一体をなしているのであるが、中国指導層はこのような緊密な内的関連がまったくわけわからないばかりでなく、同じく社会主義社会のもっとも基本的な本質規定を示しているにもかかわらず、意図的に、第一の根本的本質規定、つまり「商品も価値もすべて存在しない」という規

定にかんする叙述部分を目にしながらかれを無視したばかりでなく、なんと、この本質規定をふみにじって、「社会主義社会に商品生産と貨幣流通があるのは当然である」という、まったくの反マルクス＝レーニン主義的「理論」をこしらえあげているのである。この簡単なひとつの事実によって、われわれは、中国指導層の面々がいずれも、マルクス主義の基本的文献についてその簡単な内容すらわけわからず、またこれを正しく理解することに努めることなどいっさい心がけないこと、その俗物的頭脳をもってマルクス主義理論の真髓を愚弄してこれを彼ら自身の都合にあわせて歪め、変造してやまないこと、そのような曲解、変造については勤労人民大衆はなにひとつ判断できず、指導層の権威的宣伝によってたやすくこれを懐柔し、信奉させることができるという、大衆蔑視と大衆引き回しに徹した考え方の持主にほかならないことが、この上もなくよく示されているのである。そこで、「労働に応じた分配」という聞えのよい合言葉について、彼らがいかに経済学の初歩的概念について無知であるか、それにもかかわらずマルクス主義理論の重要な命題をいかに曲解し歪めているか、理論を愚弄し大衆を愚弄してしかもいかに空っぽの権威保持に汲々としているか、等々といった客観的真実を刻明に描き出してみることにしよう。

「労働に応じた分配」ということは、わかりやすいいえば、たとえばa量の労働を給付した者にたいしては、それに見合って、たとえば $(a-x)$ 量( $x$ 量は社会的必要充足分としての控除量)の労働をふくむ消費手段または生活手段を社会が与える、ということであり、また製鉄労働者甲の労働量と織物労働者乙の労働量とが等しいときには、甲と乙とはその労働量に見合って等しい労働量の対象化した量の生活手段を受けとることができるし、また受けとらなければならない、ということである。だが、量的比較は質的同一性を前提するということは、ヘーゲルの『論理学』を学ばなくとも、中学生でも知っているような、簡単な常識である。製鉄労働者の冶金労働と織物労働者の織物労働とはその質をまったく異にしており、したがって製鉄労働と織物労働とを等質のものとして、量的比較をすることはまったく不可能である。いや、この二種類の労働に限ったことではない。およそ資本主義社会にある労働は——もちろん自称「社会主義社会」の労働もふくめて——ひとつとして等質のものはなく、したがって簡単に量的比較のできるものはないのである。それゆえ、労働者が給付した労働について、その労働量を計るとか比較するとかいうことは、オシャカさまでもできることではないのである。

ところが、問題はまだある。というのは、労働者が給付した労働にたいして社会から与えられる生活手段について、そこに労働者が給付した労働量と同じ労働量がふくまれていることを、どうして計量することができるか？ 小麦粉1キログラム、綿布20メートルのなかに、いったい、何時間の社会的人間的労働が対象化されているか、はっきり答えてみるがいい。

要するに、この聞えのよい合言葉は、まったく不可能なことを、あたかも実行できるかのように見せかけて空っぽの宣伝をしているものにほかならないのである。しかし、中国指導層がこぞってこのようなお体裁だけの合言葉を大々的に宣伝してまわっているということについて



は、われわれは客観的な意味と役割とについて慎重な考慮をはらうことが、絶対に必要である。そこで、つぎに、この合言葉の客観的な意味と役割とについて、以下で立ちいって論究することにしよう。

イ さきにも述べたように、異なった種類の労働について、および生活手段にふくまれている労働について、これを量的に比較することは絶対に不可能である。中国指導層は、ヘーゲルの『論理学』はもとより、『資本論』の冒頭の第1章にすら目を通していないことが、これによって明証されている。それどころか、量は質を前提するものだという簡単自明な常識さえ持ち合わせていないことが示されているのである。

ロ 上に見たように、「労働に応じての分配」は、オシャカさまでもできることでないのは、ちょっとやってみただけで、誰にでもすぐわかることである。実行不可能であることがはっきりしているながら、なおかつこの合言葉を大々的に宣伝してまわっているという事実は、この合言葉の真実の内容を正確に認識することになれていない勤労人民大衆の低い知識水準を見越して、これを正しく啓蒙することなど心がけず、むしろ反対にこの低水準を助長し、これに乗じて、あたかも指導層全体が労働者の利益を第一に考え、正しく民主的な分配をなしとげているものであるかのような、錯覚と盲目的追従とに陥らせることを期待しているものだ、ということをも端的に示すものである。啓蒙と正しい指導ではなく、まさにその正反対の愚弄と引き返し、——これが右の合言葉の客観的な「使命」である。

ハ 社会の成員がすべてなんらかの社会的必要労働を分担し、しかもその労働量が同じ単位によって比較・計量される等質のものであるという社会は、資本主義社会よりはるかに高度の発展をとげた社会主義社会を描いてはほかにありえないのであるが、このように労働の比較・計量が可能かつ必然であるところは、商品や貨幣は存在する余地のまったくない余計者となる。つまり、「労働に応じての分配」があれば「商品や貨幣は存在しえない」し、「商品や貨幣が存在」すれば、「労働に応じての分配」は絶対不可能である。つまり、彼らは、商品や貨幣がなぜ存在するか、そもそも商品とか貨幣とかはどのような本質をもつものかということ、簡単にいえば、科学的社会主義の基礎となっているマルクス経済理論におけるその初歩的・基本的概念すらまともに理解せず、理解しようと努めることもしないということが、ここに表示されているのである。

ニ 「労働に応じての分配」というときの「労働」にもいろいろのものがある。社会の存続にとって必要・不可欠な生産的労働および不生産的労働もあれば、社会の存続にとってまったくかわりのない社会的不必要・不生産的労働というものもある。この最後のものは、その大半が広範な勤労人民大衆から搾取・収奪された龐大な額の剰余価値に寄生するもので、日本のように発達した資本主義的「金満国」には、この種の労働に従事する文字どおりの寄生的階層はきわめて厚いものがあるのである。この種の寄生的階層は、社会が資本主義の段階から社会主義の段階にただしく発展をとげたときには、もちろん、その存在の基盤もろともこの世から

消え失せることになっていることはいまさら言うまでもないところである。ところが、奇妙なことに、「社会主義国」中国には、こうした不必要・不生産的労働で飯を食っている人間がおびただしくいるようである。中国全土を股にかけて横流しやヤミ取引などでしこたまそのふところを肥やし、インフレに油をそそいでいる何十万、何百万という、大小無数の「担ぎ屋」は、その一例にすぎない。また、必要・不生産的労働に従事する尨大な数に上る階層、たとえば、官僚についてみた場合、国家から支給される賃銀や手当が、上から下まで、なんと幅広く、その隔たりの大きいことであろうか。いったい、平課員の労働と課長、局長の労働とは、どのような基準で計量され、現在一般的にみられるような驚くべき格差をつくりだすことになっているのか？ 申しあげにくいことではあるが、たとえば胡喬木氏は、社会科学院院長の要職にあったとき、その賃銀や手当は、その労働に應じてきめられたものであろうか？ おそらく院長としての各種給与の額は平労働者の数倍、いや数十倍にも達するほどのものではなかったかと推察されるのであるが、それは、この拙論の冒頭でつぶさに見たように、「中国では計画的、均衡的發展の法則、価値法則を運用し、商品生産と商品流通を發展させ、労働に應じた分配原則を堅持して、ますます社会主義体制を發展させていくことができる」という、まったくでたらめの、反マルクス＝レーニン主義的「理論」をこしらえあげたという、その「労働」に應じての分配によるものであろうか？ 「労働に應じての分配」という合言葉こそは、必要、不必要を問わず、こうした平労働者の手の届かない高額な賃銀にありついている闇の、また公然の、特権階層の存在をごまかし、隠蔽するものでなくて、なんであろうか！

ホ 右の聞かせ文句が事実まったく空虚な飾りにすぎないとすれば、いま「社会主義」中国で現実に支払われている「労働の対価」としての賃銀は、そもそものような内容をもつものと解すべきであるか、ということが当然に問題として浮びあがってこなければならない。いったい、中国における労働賃銀はどんなものかといえ、それは、いうまでもなく、資本主義社会における労働賃銀と寸分変わらないものであって、それ以外のものでありえないことは、明白である。なぜならば、中国においては、国営企業で働く労働者も外国資本による合弁企業で働く労働者も、同じ名称と同じ内容の賃銀を支払ってもらっているからであり、外国資本はその投資から本国におけると同額かまたはそれ以上の利潤を——さまざまな名称のもとに——吸いあげなければならないからであり、したがって、それらすべての企業を通じて支払われる労働賃銀は、「労働の対価」などではなく、労働者の担っている人間労働力、商品としての労働力の販売価格以外のなにものでもないのである。商品としての労働力はその再生産費である価格を支払われて買手の充用するところとなり、その労働力の流動＝支出である労働によってその価格＝再生産費よりも大きな価値を、つまり大きな剰余価値をつくりだすのであり、この剰余価値は、利潤とか利子とか、その他さまざまな名称をもって買手のふところにはいるのであって、こうしたことは、マルクス主義経済学ではおよそイロハにすぎないのである。もし労働者が、現実にその労働によってつくりだしただけのものを、さきに見たように社会的必要充足分に相

当するだけのものを控除して残りの総額を受けとるものとすれば、外国資本に依存する企業の全部が成り立たなくなつて、たちまち姿を消すことになるであろう。もし「労働に応じての分配」の原則がrippleに施行されるならば、そのときには『特区』などというしゃれた名称をつけた特別世界でそのあくなき利潤追求欲と動物的享楽本能とを心ゆくまで満たしているあらゆる種類の寄生的動物どもは、たちまちその樂園の消滅によってことごとく雲散霧消することになるであろう。こうした必然の成り行きは労働賃銀の本質を精確に解明したマルクス経済理論によつて的確に究明されるところであつて、「労働に応じての分配」などという甘ったるい飾り文句は、現実に遂行されている剰余価値の搾取、不生産的特権階級の寄生的存在という、まさに反社会主義的事態をごまかし、隠蔽し、「合理化」するものでしかないのである<sup>1)</sup>。

#### 4. マルクス主義理論にたいする曲解と誹謗・攻撃

さきに本稿の「2」においてつぶさに見たように、マルクスのいっさいの著作においても、またその盟友エンゲルスのすべての労作においても、われわれは社会主義社会にも商品があり、価値があるということを認めたりまた主張したりしているような文章はひとかけらといえども、これを見出すことはできない。それどころか、正にその反対に、マルクスもエンゲルスも、そしてレーニンも、異口同音に、社会主義社会には商品も価値も貨幣もいっさい存在しないことを明確に指摘し、強調しているのである。それゆえ、マルクス＝エンゲルスの著作そのものについて社会主義社会のあり方、そこで貫徹すべき経済法則の内容について真面目にこれを学びとるほどの努力をする人間であるならば、胡喬木はじめ中国指導層全体が再三力説強調している「社会主義社会にも商品、価値、貨幣があるのは当然で、われわれは価値法則を利用して計画経済をおしすすめるなければならない」という主張そのものがマルクス＝エンゲルスの教示を裏切り、マルクス＝レーニン主義をないがしろにするものにほかならないことに、すぐ気がつくはずである。だが、こうした事実が明るみに出ることは、彼ら指導層にとってはまさに命とりである。それゆえ、中国指導層が現在の地位と権威とを維持してゆくためには、是が非でも、

1) 中国指導層のうたい文句—「労働に応じての分配」という文句については、ここでは、これをそのまま——善意に解釈して——マルクスの『ゴータ綱領批判』のなかの社会主義社会についての説明内容と対比させて吟味したのであるが、しかし、客観的に事実についてみるならば、現在中国で実際に行なわれている「労働に応じて分配」は、資本主義社会における「労働に応じての賃銀」とまったく同じ内容をもったもの、つまり「労働に応じて」は「労働力に応じて」の歪められた文句、剰余価値搾取を隠蔽しごまかすきまり文句にほかならないことがわかるのである。最大限の剰余労働の搾取を隠蔽しごまかすために資本家連中が受用する「労働に応じての賃銀」という、まやかしのきまり文句をもってきて社会主義社会の基本原則などとふれまわるとは、また、なんという見下げはてた資本主義御用政治屋どもであろうか！ この種の資本家受用のきまり文句—「労働に応じての分配」の基本的性格については、さきに拙論『「労働に応じての賃銀（報酬）」の経済学的考察』（愛知大学「法経論集経済・経営篇Ⅰ 第108号」, 1985年8月刊行）の中で詳しく——歴史的考察も加えて——論究しているので、ここでは、その側面について立ちいることは控えたのである。

マルクス＝エンゲルスの著作の中に「社会主義社会にも商品があり価値がある」ということを裏書きしていると見られる文章を探し出さなければならない。全く不可能である仕事をも可能であるものごとくするという超能力は、やはり社会科学の院長とか国務院の顧問といった最高級の地位を占めうるほどの人物を描いては一人として持ち合わせてはいない。このような仕事をあえて引き受けたのは胡喬木氏そのひとであって、このようなもっとも骨の折れる労働は、もっとも高い分配に相当するものといわなければならない。ただひとり、胡喬木氏にしてはじめて発見することのできた珠玉の文章というのは、『資本論』第3巻第49章「生産過程の分析のために」の最後のパラグラフであって、われわれが本論稿の最初の「1」の中で見た胡喬木の論文の中にも引用されているものである（本稿71ページ参照）。はたしてこの珠玉の文章が、中国指導層にとってお読みの証明として役立つものであるか、それとも、その反対に、彼ら自身の理論的ならびに論理的思考能力の完全な欠如に加えてマルクス主義理論にたいする恥知らずな改ざんの確実な例証として役立つものになるのか——これは慎重かつ厳密な吟味が要請される重大な問題である。そこで事柄をよく把握するために、右の文章がなぜかけられるにいったかという経緯について簡単な理解をえておくことにしよう。

マルクスは、右の第49章の最後の部分において、俗流経済学者シュトルヒ（Storch）の誤りだらけの主張をとりあげてこれに的確な批判を加えているのであるが、まずその俗流経済学者の主張するところをつぎに引用してかけよう。

『『国民的收入をなしている販売可能な生産物は、経済学では二つの違った仕方では考察されなければならない。すなわち、個々人にたいする関係では価値として、国にたいする関係では財貨〔des biens〕として、考察されなければならない。なぜならば、一国の収入は、個人の収入のようにその価値によってではなく、その有用性〔utilité〕によって、またはそれが満足させる欲求〔les besoins〕によって評価されるからである』（『国民的收入の性質にかんする考察』、19ページ）」（Marx-Engels Werke, Bd. 25, s. 859, 訳大月版1090ページ、〔 〕内は山本のもの）。

ここに引用されたシュトルヒの叙述は、商品生産社会つまり資本主義社会においては、国の収入（le revenu）と個人の収入とはその性質を区別すべきこと、個人の収入は価値によって評価しなければならないが、国の収入は、価値ではなく財貨、つまり欲求を満足させる使用価値によって評価しなければならないと、主張している。つまり、彼は、人間の労働が具体的労働と抽象的労働との二面から成っていて、同じ労働の一面としての具体的労働が労働生産物の有用的形態つまり使用価値——シュトルヒの言葉をかりれば、財貨、または諸欲求——に、他の一面の抽象的・人間的労働が同じ労働生産物の価値に、同時にそれぞれ対象化するものであること、この労働の二面性はいかなる人間社会でも人間がこれをなんらかのかたちで意識して労働しなければならない、いわば人間社会の客観的自然法則であるが、商品生産社会では、私的所有にもとづく私的労働の故に、抽象的・人間的労働はそのものとしてはとらえることができず、労働生産物に対象化して商品そのものの価値、いいかえれば商品が人間に対立して独自

にもっているうちまたは社会的な力となったときに、ようやくこれを知ることができるのであって、商品生産社会でないその他の人間社会では、人間の労働はつねに二面的であるが、しかし、抽象的労働はそのものとして意識され、それが労働生産物に対象化してその価値となることはまったくありえないのである。要するに労働の二面性の精確な把握は、人間社会を支える人間の労働のあり方を正確にとらえるうえで欠くことのできない根本的前提要件であるが、とりわけ商品生産社会の経済学的分析にとっては決定的なものであって、それゆえにこそ、マルクスは、主著『資本論』第1巻第1章の第1節で「商品の二要因 使用価値と価値（価値実体と価値量）」を分析しながら、すぐつづいて第2節「商品に表わされる労働の二重性」をおき、とくにその冒頭で、つぎのように力説・強調しているのである。

「このような、商品に含まれている労働の二面的な性質は、私がはじめて批判的に指摘したものである。この点は、経済学を理解にとっては決定的な跳躍点であるから、ここでもっと詳しく説明しておかなければならない」(Marx-Engels Werke, Bd. 23, s. 56, 訳大月版56ページ)。

シュトルヒのような俗流経済学者がこのように決定的意義をもつ労働の二面性など、認識することすらできず、そのために、個人の収入については抽象的労働の対象化という、労働の一面のみに執着して価値だけをとりあげ、国の収入については具体的労働という一面のみにしがみついての使用価値のみの固執という、見えすいた錯誤におちいつているのは、むしろ当然の帰結というべきであって、マルクスは、その理論的愚昧ぶりを指摘するばかりでなく、労働の二面性の認識とその理論的・実践的な意義について、以下に見られるように、俗流的頭脳をもってしてもよくのみこむことができるように<sup>2)</sup>、懇切・丁寧に、資本主義社会と社会主義社会とをあげて説明してくれているのである。

「第一に、その生産様式が価値にもとづいており、さらに進んでは資本主義的に組織されている一国を、ただ国民的欲求のためにだけ労働する一つの全体とみなすことは、まちがった抽象である。

第二に、資本主義的生産様式の揚棄の後にも、社会的生産が保持されるかぎり、価値規定は、労働時間の規制やいろいろな生産部門のあいだへの社会的労働の配分、最後にそれらに関する簿記が以前よりもいっそう重要になるという意味で、依然として主要なものである」(Marx-Engels Werke, Bd. 25, s. 859, 訳大月版1090ページ、なお訳文は山本が訂正を加えた)。

ここに述べられている「第一」も「第二」も、その内容はこの上なく事理明白である。「第一」については、『資本論』のなかでマルクスが終始一貫くりかえしている「最大限の剰余価

2) この決定的に重要な労働の二面性の正確な把握がいかに高度・精密な論理的思考能力を必要とするものであるかということは、スターリン治下の著名な『資本論』学者であるデ・ローゼンベルグやスターリン論文を大々的に担ぎまわったわが国の宮川実が、口を揃えて、「商品生産社会以外の社会には、商品価値を生む労働、つまり抽象的労働はなく、したがって労働の二面性はありません」と説いてまわっているという簡単な事実によってもよく示されているのである。彼らは、マルクスがここで社会主義社会についてなにを説明しているのか、全然理解することができないのである。

値の追及」ということを想起するだけでも、その意味は容易にとらえられる。「第二」についても、われわれがさきにとりあげたマルクスの名著『ゴータ綱領批判』の簡潔な叙述に目を通すだけでも、その真意は正確に認識されるはずである。そこでは、「第一」の資本主義社会の説明にたいして、社会主義社会でも、労働の二面性を明確に把握するだけではなく、この二面の労働を的確におさえ、確実にこれを社会的に運用することが絶対に緊要であるということが、明確に主張されているのである。

社会主義社会にも商品価値が存在するということをマルクスが認めていると考えられる文字のはしくれでもマルクスの全著作のなかから発見することが、与えられた至上命令となっている胡喬木は、この「第二」のなかに「価値規定」というたったひとつの言葉を発見して、さぞかし鬼の首でもとったかの感にひたったことであろう。だが、まことにお気の毒にも、彼は、これによって、「価値規定」というマルクス経済学のもっとも基底的な概念の内容についてまったく理解していないこと、したがってそのためにこの「第二」の文章の内容を正確に読みとることができず、かえってこれをまったく歪めたものにすりかえてしまったことに気がつかない有様である。生半可な先入主などにとられることなく、マルクスの基本的立場に則して正確にその教示の内容を読みとることに努めること——これは、いうまでもなくわれわれが守るべき第一の心得である。

まず、「価値規定 Wertbestimmung」とは、どういうことか？ それは、価値の量的規定のことであり、その内容を示せば、「価値の大きさは、社会的必要労働時間によってきまる」ということであり、さらにたちいっていうならば、その「社会的必要労働時間」というのは、「現存の社会的に正常な生産条件と労働の熟練および強度の社会的平均度とをもって、なんらかの使用価値を生産するために必要な労働時間」ということである。この「労働時間」は、たとえば「銑鉄1トンの価値は15労働時間である」というように、絶対的に確定することができるかといえば、資本主義社会ではそれはまったく不可能なのである。なぜならば、第一に各商品生産者の労働は、自分個人の利益のための私的労働であり、そのままでは社会的労働とはなりえない。第二に、どれが正常な標準的な生産条件であるか、私的生産者にとっては皆目わからない。そしてなによりも決定的なことは、各私的生産者の担っている労働力そのものも、またそれを実際に流動させる仕方、つまり労働の熟練および強度も千差万別であってどれが社会的平均度であるかは絶対的にとらえないのである。それゆえ、労働そのものをもってはそれがどれだけの社会的必要時間に相当するものかはまったくわからず、またその労働が社会の存続を支える社会的労働であることもわからず、したがって、生きた労働そのものをもってしては社会からなにも受けとることはできない。それゆえ、私的所有のもとでは、その私的・個人的労働をもって労働生産物をつくりだし、その労働の一面の具体的労働をもって使用価値をつくり、他の一面の抽象的・人間的労働を生産物の価値として物化させ、この使用価値と価値を独自にそなえた商品を社会＝他人に提供して、その使用価値が社会的に有用なものと認められ

たとき、はじめて他の商品をもって相対的に表現することを許されたその商品価値を実際に実現することができるのである。ここでは、価値規定は、労働時間をもって絶対的に表示されるものではなく、たんに相対的に等しい量の価値をもつものとみなされる他の商品によって、しかも不断に動揺する関係において、示されうるにすぎないのである。

では、社会主義社会においては事態はどうなっているかといえ、ここでも社会の存続・発展にとって必要なさまざまな種類の労働生産物を生産しなければならず、この社会の自由にしうる社会的総労働力をそれぞれ必要に応じて各生産部門に計画的に配分しなければならない。その配分を決定するためには、なによりもまず、各生産部門の単位生産物の生産に必要な社会的必要労働時間と、その社会が自由にしうる社会的総労働時間とおさえ確定すること、社会的必要労働時間も自由にしうる社会的総労働時間も、同じく高度の水準に達しているすべての成員の同等の社会的平均的質の労働力の流動としての社会的平均的労働をその単位として計算されうるものとなっており、これによって、それぞれの部門への労働力の配分も計画的に行なわれるものとなっている。要するに、商品価値のように、抽象的・人間的労働が独立して人間に対立し支配することではなく、そもそも価値なるものは存在する余地はないのであるが、価値規定の内容を成す社会的必要労働時間による単位生産物の必要労働量の確定、総労働力の各生産部門への配分の計算の基準としての社会的必要労働時間は、社会的・計画的生産にとって絶対に必要なものであること、——このことをマルクスは「価値規定は依然として主要なものである」と言ったのである。それは、価値の存在を認めているものではなく、価値そのものは全く存在せず、その量的規定の基本である社会的必要労働時間による直接的・絶対的算定とその表示との必要と可能性とが社会主義社会ではじめて実現されうるものであり、また実現されなければならないことを、明確に示すために、資本主義社会との対比をはっきり示すものとして採られた言葉なのである。

さきに本稿の「2」にかかげられた『ゴータ綱領批判』のなかで、マルクスが、社会主義社会には商品も価値も存在しえないことをきっぱり声明したあとで、そこでは各成員は、彼が社会に与えたのと同じ量——ただし必要な控除をして——の労働がふくまれている消費手段を社会から受けとると説明されていたのであるが、こうした労働量の計算・記帳こそは、社会主義社会の存続・発展にとって必要不可欠のものであり、それが可能かつ必然となったのは、この社会の成員が一人残らずきわめて高い水準の均衡のとれた精神的能力と肉体的能力の担い手となっているばかりでなく、すべての成員が、個別的生産を放逐して、結合した・集団的な機械化作業に従事する真に自覚ある社会主義的労働者になり変っているからこそなのである。こういう条件がそなわっている社会主義社会においてこそ、さきに本稿の「2」の中で引用したエンゲルスの「直接労働時間による投下労働量の計算と表示」がはじめて可能かつ必然となり、最終的に「価値」を片づけることができるし、またこれを永遠に葬り去ることができるのである。

さて、いささか長きにわたっての精確な検討によって、胡喬木が論拠として探し出した唯一の珠玉の文章がどのような内容を説明したものであるかということは、もはや明白である。それは、社会主義社会にも価値規定の内容そのものが妥当するものだ、ということを説いたものである。胡喬木は、価値規定という肝心の言葉の意味もわからず、むりやりこれを価値の存在をあらわしたものと曲解し、マルクスも社会主義社会に商品や価値が存在することを主張しているとこじつけたものである。価値規定の意味内容がわからない者は、たとえもっともらしく「労働に応じての分配」などという文句をふりまわしていても、その言葉そのものが彼ら自身の迷蒙をあらわに示すものとなっていることすら、気がつかないのである。

以上によって、マルクスの命題を胡喬木はじめ中国の指導層の面々が完全に曲解しているという事実は明白となったが、しかし彼らがこの命題をもってマルクスも社会主義社会における商品や価値の存在を確認していると主張していることについては、重大な意味がふくまれていることを、われわれはとくと見定めなければならない。マルクスもエンゲルスも、そしてレーニンも、終始一貫、いたるところで、社会主義社会には商品も価値も存在しないということをくりかえし説明し、論証していることは、すでに周知のところであって、マルクスの主著『資本論』にも名著『ゴータ綱領批判』にも、さてはエンゲルスの名著『反デューリング論』等々にも、さきによく見たように、疑いようもなく明確に述べられているのである。ところが、胡喬木はじめ中国指導層の面々は、これらの明確な叙述 そのものの存在はよく知っているはず——もし知らないとすれば、これはまったくのペテン師ぞろいということになろう——でありながら、例の珠玉の文章ではマルクスは社会主義社会にも商品や価値があることを認めていると主張している。ということは、マルクスをとらえて、「彼は、一方でさかんに商品や価値がないということを書きたてながら、他方ではそれらが存在するという文章を書いている人間である」としているわけである。つまり、彼らは、客観的には、マルクスをもって本来の主張とあべこべのことを主張している者に仕立てているのである。この明白な客観的事実にすら気がつかないほど、彼らは反マルクス主義的主張の宣伝にうちこんでいるという次第である。マルクスを論理的矛盾をあえて犯す人間に仕立ててまで、えせ社会主義社会の「合理化」に熱をあげるとは、また、なんとたいした「マルクス＝レーニン主義」の堅持者たちであることよ！

ところで、苦心の末発見した例の文章を唯一の論拠に仕立てて、マルクスも社会主義社会に商品や価値が在ることを認めているとこじつけ、マルクスを論理的矛盾をあえて犯す人間に仕立てることで、けんめいにえせ社会主義社会の「合理化」をはかることに力をつくしてはみたものの、「価値規定」という彼ら自身にもわからないようなあやふやな文章よりは、『ゴータ綱領批判』や『反デューリング論』その他のほうがはるかにわかりやすく、しかも疑いもなく、社会主義社会には商品も価値も存在しえないときっぱりと説明されているので、マルクス主義の主要文献に通じようとする篤学の人々はもちろんのこと、一般解説書を読むほどの人々は、中国指導層のためにするまやかしや「合理化」には、おいそれとはついていくものではない。



マルクス主義の文献がひろく行きわたるようになればなるほど、中国指導層のまやかし、こじつけは、しだいにあらわになってこなければならぬ。とすれば、これはまさに命とりに、つまり中国指導層にたいする人民大衆の信頼と支持はその根底からひっくりかえることになる。ことここにいたっては、問題はマルクス＝エンゲルスの特定の問題にかんする解釈の正否にあるものではなく、直接にマルクス＝エンゲルスのうちたてた理論そのものが正しいか正しくないか、それは現在の問題にたいして正しい基準となりうるか否か、ということにすりかえられなければならないようになったのである。マルクス主義理論は、現在の段階ではもはや一般に妥当しえないものになっているのだ、というのが、中国指導層の地位保全のために考え出された、唯一の「活路」となったのである。この指導層の「活路」の様子は、以下簡単に列挙してごらんに入れる各種機関を総動員してふりまかれるマルクス主義理論にたいするさまざまな非難・攻撃によく示されているのである。

まず、中国共産党の機関紙『人民日報』（1984年12月7日付）に発表された『理論と実際』と題する評論員の論文のなかから、聞かせどころを引用してかかげてみよう。

「理論を習得するには真剣に本を読まなければならない。マルクス主義の古典は非常に多いので、主要なものを選んで読み、読み通す必要がある。いまは経済理論を重点的に勉強するほか、最新の科学技術知識も勉強する必要がある。マルクス主義を学習するときには、古典の著者が明らかにした普遍的法則および問題観察・解決の立場、観点、方法を重点的に学習すべきで、個々の字句や一部の具体的論断にこだわってはならない。マルクスが死去してからすでに101年がたち、その著作は100年余り前に書かれたものであり、のちになって状況が大きく変化したため、当時の考え方に必ずしも妥当でなくなったものもある。マルクス、エンゲルスが経験せず、レーニンも経験したことのない多くのものがあり、彼らはそれらに触れていない。マルクス、レーニンの当時の著作でわれわれの現在の問題を解決することを求めてはならない。われわれは学習においてこれらのことを考えなければならない。毛沢東同志はかつて、「いまでもまだ、マルクス＝レーニン主義の書物にある個々の字句をできあいの妙薬とみなし、これを手にいれさえすれば、骨もおらずに、まちがいなく万病を治せるかのように思っている者が少なくない。これは幼稚な人々の蒙昧さを示すものであって、われわれはこれらの人々に対して啓蒙運動を行わなければならない」と鋭く批判した。マルクス主義に対して教条主義的態度をとってはならない。時代は発展し、新しい状況や問題がはてしなく次々と現れており、マルクス・レーニンの著作の一部の論断で豊かな生活を梓にはめようとすれば、歴史の前進を阻むことにしかならない。われわれマルクスの後継ぎには実践の中でマルクス主義を豊かなものにし、発展させていく義務がある。」

諸君、よくお聞きいただきたい。たとえばマルクスの主著は100年あまり前に書かれたものであるから、その後「状況が大きく変化したため」に、その「考え方」はもはや妥当しなくなったのだそうである。では『資本論』は、いったい、なんのために書かれ、どんなことを明ら

かにしようとしたものなのか？ この最も基本的な文献をまじめに読みもしないし、またちょっとやさっと読んだところでとうていわかるはずもない評論員をはじめ中国指導層の面々のために、マルクス主義理論の基本をなしているこの主著について、マルクスの唯一の傑出した後継者レーニンが懇切丁寧に解説してくれているところを、つぎに引用してかかげておこう。いまから100年近く前に著わされた名著『「人民の友」とはなにか、そして彼らはいかに社会民主主義者とたたかっているか？』のはじめの叙述部分のなかで、レーニンは、マルクスの名著『経済学批判』の「序言」のなかにかかげられている有名な——といっても評論員たち明き盲にはわかるはずもないが——いわゆる「唯物史観の定式」の画期的な意義を説明したのち、つづけてこう説明している（……は省略部分）。

「ところで、マルクスは、1840年代にこの仮説〔唯物史観〕を述べてから、材料の事實的（このことに注目せよ）研究にとりかかっている。彼は一つの經濟的社会構成体——商品經濟制度——をとって、膨大な資料にもとづいて（この資料を彼は、25年以上も研究したのだ）、この構成体の機能と発展との法則のきわめて詳細な分析をあたえている。この分析は、社会の成員間の生産関係だけに限定されている。マルクスは、問題の説明のために一度もこの生産関係の外部にあるなにかの要因にたよることなしに、社会經濟の商品的組織がどのようにして発展するか、その組織がどのようにして資本主義的組織に転化し、ブルジョアジーとプロレタリアートという敵対的な（すでに生産関係の範囲内で）階級をつくりだすか、その組織は、どのようにして社会的労働の生産性を発展させ、そして、まさにそのことによって、この資本主義的組織そのものの基礎と和解しえないまでに矛盾するようになる一要素をもちこむか、ということを知る可能性をあたえている。

これが『資本論』の骨組みである。だが、重要な点は、マルクスがその骨組みだけでは満足しなかったこと、彼が普通の意味での「經濟理論」にとどまらなかったこと、彼が——ある社会構成体の構造と発展とをもっぱら生産関係によって説明しながらも——それにもかかわらず、この生産関係に照応する上部構造を、つねに、そしていたるところで追及し、この骨組みを肉と血でつつんだことにある。このためにこそ『資本論』はきわめて巨大な成功をおさめたのであって、そこで「ドイツの經濟学者」のこの著書は、資本主義的構成体の全体を生きた構成体として——すなわち、日常生活の諸側面や、この生産関係に固有な階級敵対の實際上の社会的現われや、資本家階級の支配を保護するブルジョア的な上部構造や、自由・平等、等々のブルジョアの觀念や、ブルジョアの家族関係をともなった構成体として——読者に示したのである。ダーウィンと比較することがまったく当をえていることは、いまや明白である。『資本論』——これはまさに、「モン・ブラン山ともいふべき多量の事實資料に仕上げをあたえる、いくつかの、相互にきわめて密接に関連した、概括的な觀念」にほかならない。そして、もしだれかが、『資本論』を読んで、この概括的な觀念に気づかなかったとしても、それは、もはやマルクスの罪ではない。……これと〔ダーウィンのすぐれた業績と〕同じように、マルクスは社会を、

当局者の意志によって（あるいは同じことだが、社会や政府の意志によって）どうにでも変わりうる、偶然に生起し、また変化する、個々人の機械的な集合体と見る見解に終止符を打ち、また、経済的社会構成体という概念を当該の生産関係の総体として確定し、このような構成体の発展が自然史的過程であることを確定して、はじめて社会学を科学的な基盤の上にすえたのである。

いまでは——『資本論』が出現してからは、——唯物史観はもう仮説ではなくて、科学的に証明済みの命題である。……唯物論は、ミハイロフスキー氏が考えているように「大体において科学的な歴史観」ではなくて、唯一の科学的な歴史観なのである」（В.И. Ленин, Сочинения, том 1. стр.123—125, 訳大月版134—135ページ, 傍点—レーニン）。

おそらく「マルクス＝レーニン主義を堅持する」と自称しているにちがいない評論員と中国指導層の面々は、このレーニンの懇切きわまる明確な教示を一度は読んだものであろうか？  
いまからでもおそくはない、とくと目を開いて、ここに展開されている金文字をしっかりと読むがいい。読んだところで、はっきりと答えるがいい。いったい、ここに述べられていることのうちで、どこが古臭くなって今日では妥当しえない、不適当な命題があるか、明確に示してみたまえ。

『資本論』では、その冒頭の第1巻第1章で「商品」が分析され、それは私的所有という生産関係のもとで労働生産物が必然的にとる形態規定であって、私的労働の一面の抽象的・人間的労働が商品の価値として物化・対象化して人間から独立した、商品そのものの社会的力となり、商品そのものが人間を支配するものとなり、さらに商品生産・交換の発展は価値の結晶ともいべき貨幣を必然的に生みだし、私的商品生産者すべてがこの貨幣——マルクスは「貨幣物神」と名づけている——によって支配されること、そして、商品生産の発展はさらに資本家と賃銀労働者という二つの階級を生みだして貨幣は賃銀労働者から剰余価値を搾取する資本になること、が解明されているのであり、この資本による資本主義的生産の高度の発展によってはじめてそこにより高い社会への移行＝変革を必然にする生産力と生産関係との矛盾の激化＝成熟と、そのより高い社会、つまり社会主義社会への変革とその建設を遂行すべきは唯一の主導的・主体的勢力としての大工業プロレタリアートの形成＝組織とその歴史的役割とが、その理論体系のしめくりとしておかれており、これが科学的社会主義の核心を成すものとなっているのである。資本主義社会の発展がはじめて社会主義社会の物質的基盤とこれを担う主体的勢力とをつくりあげるものであること、そのより高い社会主義社会は私的所有も私的生産もすべて一掃した社会的所有のもとでの社会的生産による高度の生産力の上に立つ歴史的社会であって、商品や貨幣などすべて存在する余地すらないこと——これらのことは、マルクス主義理論の基本的根幹をなすものである。

しかし、これらの基本的理論などよりは、中国指導層の唱える「商品と貨幣のある社会主義社会」という言葉を「合理化」してこれを宣伝することが焦眉の急務である。さきにあげた

『人民日報』評論員の論文『理論と実際』と時を同じくして「光明日報」には『社会主義の理論と実践の重大な突破』と題する段若非の論文が発表され、その中で、「『決定』はわが国の全面的な経済体制改革を導く綱領である。そして社会主義経済は公有制を基にした計画的な商品経済であるというのが、この綱領の中心理論である」と述べられている。しかし、「理論と実践の重大な突破」を誇称する当のこの論文の内容は、つぎに引用する二つの言辭そのものが明示しているように、科学的経済理論の初歩的・基本的概念についての限度知らずの誤解と論理的思考の完全な欠如を実証する文章で埋めつくされているものであって、まさに「理論的・論理的思考の正常な枠の重大な突破」を示した標本というべきものである。

曰く、「社会主義経済は一種の(!?) 商品経済であり、したがって(!?), 商品経済の基本法則(!?)——価値法則(「反デューリング論」第3篇社会主義分配を参照)(!?) は社会主義経済運営の全過程(!!) に貫かれ(!!), 生産・流通・分配・消費(!?) の各分野で幅広く調整作用を果たす(!?)」(!?) と(!!) は山本のもの。

曰く、「この商品経済は計画的なものである。社会主義的公有制(!?) の実現により、統一的な計画(指令的計画と指導的計画をともに含む)が必要になり、また可能となった。しかし、商品経済には計画可能な側面とともに計画不可能な側面もあり(!!), それは計画性と不可計画性との統一物(!!), 計画と無計画の統一物である(!!) ことをも明確にしなければならない」(!?) と(!!) は山本のもの。

理論の分野でその正否を論証することは理論的・論理的思考能力の欠乏している人間にとっては、むづかしく、かえってボロを出すのがおち、である。そこで、最後に編みだされた手は、「毛沢東同志」を引き合いに出して、中国革命の実際のあり方をもってきて、マルクスをやっつける、という論法である。その論法がどんなものかを、さきにあげた論文『理論と実際』につづいて、1984年12月21日付『人民日報』に掲載された評論員論文『再び理論と実際について』の中の同じく聞かせどころについてみてみよう。

曰く、「わが党が直面している中国革命の実情は、マルクス＝レーニンともに接したことの無いもの(!!) で、われわれが打ち出した一部の主張ややり方は当然ながら彼等が論じたことの無いもの(!!) である。たとえば、マルクス＝レーニンは「農村で都市を包囲する」と言ったことは一度もない。毛沢東同志は中国の状況に基づき、人民を指導して農村革命根拠地を樹立し、農村から都市を包囲し、最後に政権を勝ちとった。事実が立証しているように、本当にマルクス主義を堅持し発展させているのは、わが党であり、党の指導者毛沢東同志である」((!!) は山本のもの)。

「もの言えは唇寒し」とはまことによく言ったものである。知りもしないこと、下手なことは、口に出さないほうが、賢明である。評論員というもったいぶった仮名をつかって本名を名乗れないこの論者は、マルクスのうちたてた科学的理論は、さきにレーニンの名著『人民の友とはなにか』から引用してかかげたレーニンの明確な叙述が実証しているように、資本主義社

会の解剖、その生成・発展・消滅＝交替の法則を体系的に論究したものであって、中国革命以前に中国がおかれていたような、発達した資本主義諸国に比べて数世紀以上もおくれた、家父長制的自然経済の濃厚に残存・支配する半植民地的・半封建的社会などについて論究したものではけっしてなく、またそういうものではとうていありえないものであったのであって、このことはおよそ字の読めるほどの者ならばだれにでもすぐわかることである。だから、そういうひどくおくれた半封建的社会について論じたことのないのは当然であって、ことさら「マルクスは論じなかったではないか」などと論じたてるのは、ためにする難癖づけでしかなく、そういう言い方をする人間は、つね日頃、まともな理論的・論理的思考など放り出して、もっとばら、こじつけと難癖づけに熱をあげ、それで辛うじて体面と権威をとりつくろっている手合でしかないということを、天下に示しているわけである。それゆえ、マルクスが論究したのは、イギリスのように、資本主義的生産の高度に発達した国での社会主義革命であって、いたく後れた半封建的社会の「民主主義」革命などでありえないのは、言うまでもないところである。この評論員は、得意然として、「本当にマルクス主義を堅持し発展させているのは、わが党であり、党の指導者毛沢東同志である」と言明しているのであるが、この評論員は、ついさきごろ、中国全土を席捲した「文化大革命」という歴史的事件については、いっさい、その記憶が消え失せてしまったというのであろうか!? 客観的な事態の推移を正しく判断する意志も能力もなく、情勢の赴くままに場当りの処方箋をひねり出して勤労人民大衆を引き廻し、愚弄しているような、行き当たりばったりの純粹日和見主義者にとっては、「理論」はつねに「実際」的必要に合せてひねりだされ、「実際」の利益に応じていつでもぬりかえられ、曲げられもする。こういう手合が、マルクス＝エンゲルスやレーニンに向って難癖をつけたところで、それは、客観的にみれば、うつけ者が天に向って唾をはきかけているのとまったく同じことで、彼らがそうした難癖をつければつけるほど、その唾は、彼らの醜い顔の上につぎからつぎへと降りかかってくるのである。

（未完）

（1990. 2. 6）